

オ一章 オ三十四軍の状況

オ一節 軍司令部の北鮮転進より終戦迄の状況

一 オ三十四軍戦斗序列下令及軍司令部の北鮮転進

一、昭和三十年六月十八日新に南東軍總下にオ三十四軍戦斗序列を令せらひ、当時中支那漢口に在りしオ三十四軍司令部は一転して北鮮咸興に移駐を命ぜらひたり。

新に令せらひたるオ三十四軍戦斗序列左の如し

オ三十四軍戦斗序列

オ三十四軍司令官 陸軍中将 務部 謙一

オ三十四軍司令部

オ五十九師団

オ百三十七師団

独立表成オ百三十三旅団

独立野砲兵オ十一大隊

別紙	永興港要塞守備隊編成	長	永興港要塞司令部	永興港要塞砲兵隊	迫惠才十五大隊	牡丹江重砲兵連隊	連隊中廿五大隊	電信才五十六連隊	永興港要塞守備隊	獨立自動車才五十五大隊	併設建築勤務才百七中隊	併設水上勤務才百三十七中隊	才百七十九兵站病院	別紙	永興港要塞守備隊編成	長	永興港要塞司令部	永興港要塞砲兵隊
----	------------	---	----------	----------	---------	----------	---------	----------	----------	-------------	-------------	---------------	-----------	----	------------	---	----------	----------

特設警備隊第四六二大隊(甲)

2. 軍司令官は所要の幕僚を従之て發行機に依り先行し六月末  
新京着、南東軍より作戦計画の内示を受け七月上旬南鮮  
麓山着、ヤヤ方面軍の主として兵站に南する打合せを行ひ七  
月十二日咸興に到着す。

軍司令部は六月下旬行動を開始し京漢線、京奉線に依り七  
月末迄に咸興に集結す。

3. 新に軍の隷下に入り六月下旬七支那南に於て掌握せるオ五十  
九師団は此の頃未だ輸送中なるの外ヤ百三十七師団及軍直部  
隊の大部は尚偽成中にして軍が七月中旬使用し得るは僅かに  
永井孝腰塞守備隊のみなり。

而して軍の主力を掌握したるは八月三日頃なりと雖も、独立義  
隊ヤ百三十三旅団、杜田江重夜兵連隊、迫原ヤ十五大隊等有力  
部隊は遂に停戦迄到着するに至らず。

二 編成裝備の概要

終戦時迄に軍の準備せる總人員は三万余あり。

その東軍は五十九師団及水兵等要塞中備隊を除きては蘇連参戦直前に編成せらるもの多き為一般に不良なり。

裝備も亦不良にして特に歩百三十七師団の如きは一門の火炮すらも有せず、他は推して知るべきなり。

兵站結構等は極めて貧弱にして常陸神谷の目途立たず、オナセ六面軍より既展せらるる一部の貨物廠に依り当分の糧生存するに止るの苦境に立ちたり。

三 作戰準備

一 作戰計画

(4) 南東軍より示されたる軍の任務は咸鏡北道より南下する敵に対し咸興附近の要地を確保して敵の京浜及平壤方面に南ラ前進を阻止し又一部を以て江東方面を掩護するに在り。

(5) 軍は右任務に基き、咸興西南方山地に軍主力を以て陣地を占領して、東岸防禦に任じ、敵若し軍の前方平地を元山方面に向ひ南進する場合には任りては攻密の手段に依りて之を抑留する所の作戦方針を執りたり。

2. 軍の指揮系統は八月初め南東軍より左の如く規定せらるりたり。

(1) オ三十四軍はオ十七方面軍の指揮下に入る、但し補給の大部は南東軍より之を受く。

(2) 羅南師管区部隊はオ三十四軍の指揮下に入る。

(3) オ三十四軍の防衛擔任地域は咸鏡南北道とす、但し羅津を含まず、咸鏡中東西、線以北の咸鏡北道はオ三軍(オ七十九師団)の管轄とす。

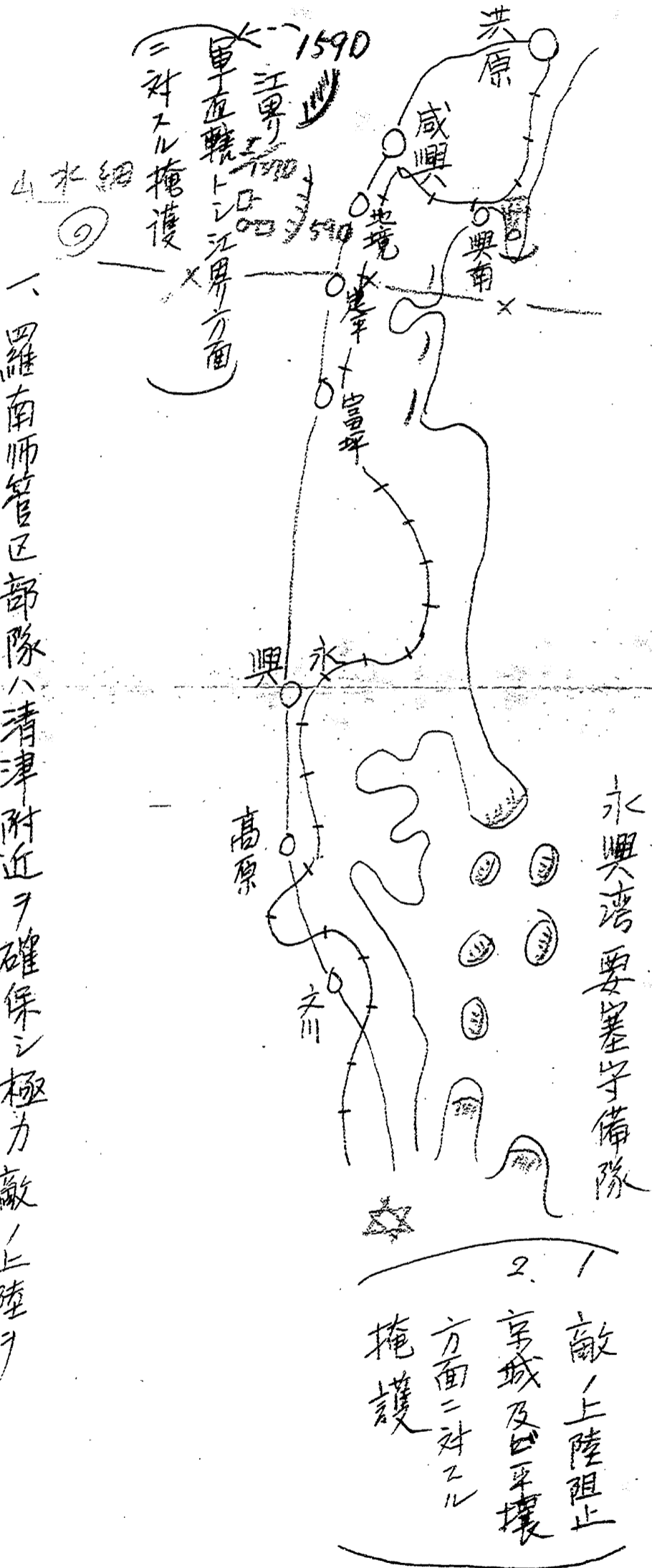
3. 防禦の善悪の兵力既備は別紙要図を如し。



34A 防禦配備図

0807

N ↑  
約50万



- 一、四羅南師管区部隊ハ清津附近ヲ確保シ極力敵ノ上陸ヲ阻止スルト共ニ陸路南下スル敵ニ対シ歩々ノ抵抗ニ依リ
- 二、赤原以北ノ地区ニ於テ敵ノ前進ヲ遲滞セシム
- 三、来着ノ混成師百三十三旅団ハ機動予備トシテ使用スルヲ定ム

4. 築城 七月下旬築城に着手したるも器材及資材不足に悩みたり。築城援助の爲関東軍建設団の二大隊を派遣せらるゝ予定なりしも遂に停戦迄到着せず。

築城は敵の戦車及砲臺に対する顧慮を主とし、陣地線の選定にオリても勉めて平地との接際部なる台地端を避くる如くヤ一線と占領せり。

5. 通信 軍司令部と直接の指揮下に在る兵団及部隊間は主として無線に依り横の支障なく連絡し得たり。

6. 教育訓練 主として左記事項を強調せる戦斗教令を發布し訓練に努めしめたり。

イ 小部隊に依る敵の前進阻止

ロ 挺進斬込

ハ 対戦車戦斗

ニ 徹底せる築城



(一) 死報國ノ精神的要平

其の他

七月頃以降朝鮮人の思想動向は遂次悪化し日本人に対し不穏の言動をなす者増加す。

オニ節 終戦時の状況

一 八月十五日停戦の大詔に依り各兵団及部隊は此の旨命令す。此の時迄清津附近に於て羅南師管区部隊が戦闘を行はる外軍収一般に交戦せず。

羅南附近の部隊は爾后戦闘を経続し十七日頃に至り停戦せり。

二 南東軍よりオ三十四軍司令官は延吉に到り韓軍と停戦協定をなすハキ命を受け、軍司令官柳中將、高級参謀扇大佐、外参謀部、副官部、兵器部、經理部より所要人員計八名を以て二十一日發行機に依り延吉に到る。

停戦交渉は軍司令官と韓軍オ三十五軍参謀長(中將)との間に行は

れり。

本交渉に於て特に問題となりたるは、北緯38以北の在鮮日本軍は全部古茨山に集結し蘇軍の捕虜たるべき要索に対し、我は其の集結位置を次々如く主張し結果局之を承認せしめたり。蓋し古茨山は鉄道破壊せらるる当時の状況及全形余剰物資を有せたる寒村たるこの理由に依り全軍餓死に瀕すること必死なればなり。

イ 羅南師管区部隊の大部 羅南

ロ オチ三十四軍及咸興附近の師管区部隊 咸興及元山

ハ 平安南、北道の部隊 平壤

三 八月二十二日軍司令官以下停戦交渉終了に付延吉より咸興に帰還す。その際蘇軍の中佐一少佐一、大尉一同行す。

八月二十四日に至り右の中佐は北緯三十八度以北 日本軍は全部古茨山に集結すべしとの指令せるを以て、軍は延吉に於て交渉に於て蘇軍オ二十五軍参謀長より指示せらるる以前項三

地奥の交渉経緯を説明し、第三十四軍は咸興附近に集結せし事を主張したるも、~~概ね~~概ねは頷として応ず。我々亦延吉交渉の集結を要を弁りて応ぜし、二十四正午、同日午後六時、二十五日午前九時同日正午と四回は亘り交渉したるも結論に達せず。

同日午後四時蘇軍が二十五軍司令官ミスヤコフ大將兼行機に依り咸興に來り之と直接交渉するに及ばず初め延吉交渉を認めらる小佐り。

此の際ミスヤコフ大將及二十二日我々同行し來りる蘇軍中佐共に延吉に於ける交渉内容を全く承知せしむる事判明せり。

四八月二十六日我装を解除す。此の際蘇軍は第三十四軍全兵力を富坪我習場へ咸興南方約三十料に集結すべきを指示す。然るに富坪は約三千人の収容力を有するのみにして而かも設備不良の甚秋冷の候ともなれば居住困難なり。故に我々は咸興、富坪尚十二所に現在駐屯しある其の儘の態勢を以て収容所とすべき旨要請したる

も蘇側は是に應ぜず、殊に八月二十二日我が飛行機に依りて先行し  
 来りて蘇軍中佐は頑として一地收容を主張せり。我方は衣食住の關係  
 を考へて之を説明し若し一地收容を爲し榮養失調及衛生施設不備の  
 爲多數の患者死亡者を出すに於ては人道上の問題として蘇連は在  
 界の批難を受くべしと強論したる所遂に蘇連が二十五軍參謀副長  
 少將某は我方に同意し十二ヶ所の分割收容を認めたり。此の結果各  
 部隊は在解二ヶ日向糧食、被服に大なる不安なく生活することを得たり。

五、武装解除と共に蘇側は咸興地区の全日本軍を三十四軍司令部の管  
 掌下に置くべしと指示せり。以て、軍司令部は新に連邦、宣徳の兩  
 行隊、元山海軍部隊及興南朝鮮窒素の火薬製造監督隊のたゞ  
 軍軍人等を掌攝する事となり。但し元山部隊は陸海軍とも通信  
 杜絶の爲軍の指揮行はしず又興南海軍軍人は失踪せり。  
 軍の持物の大部分は定平小學校に收容せし先任者たる咸興鉄

道支部長田村大佐其の隊長となりたるも、實際上の指導は第三十四  
軍司令部幕僚之を實施せり。尚軍司令官以下軍の全將官は  
八月末釜行機に依り岩海峯に送られたり。

大停戦后朝鮮人の日本人に対する圧迫は露骨となり又政治機構  
は蘇軍進駐前に於て既に全く無力化せり。軍は停戦直后斯る  
鮮人の暴動化を懸念し咸興附近の要地十余所に歩兵一二大隊  
程度の部隊を分駐せしめ警備に任ぜしめたり。然し此も軍の此  
の措置も完全に邦人を保護し得ざるを憂慮せらるるに至りしを  
以て軍は鮮女及東清に確実なる「身掛り」ある召集者は之を  
帰郷せしめ以て家族を保護せしむる事とせり。